後期計画の策定に向けた地域検討会議（第１回二戸ブロック）会議録
【二戸ブロック：二戸市、軽米町、九戸村、一戸町】

○　**日　時**：平成 30 年 12 月 26 日（水）10 時 00 分～12 時 00 分
○　**場　所**：一戸町コミュニティセンター　１階　会議室
○　**出席者**
①　会議構成員
二戸市関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
軽米町関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
九戸村関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
一戸町関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
②　事務局（県教育委員会）
県北教育事務所（資料「出席者名簿」のとおり）
県教育委員会事務局（資料「出席者名簿」のとおり）
○　**傍聴者**：一般３人、報道０人
○　**会議の概要**
◆　**議題及び報告事項**
（１）　本県の高等学校教育の現状について
【県教委】
・　本県の高等学校教育の現状について、事務局から説明をお願いする。

【県教委】
・　資料 No. １「岩手県における中学校卒業者数及び高校入学者数の推移」、資料 No. ２「再編計画策定に係る取組及び「後期計画」検討スケジュール」、資料 No. ３－１「新たな県立高等学校再編計画の概要」、資料 No. ３－２「新たな県立高等学校再編計画（前期計画）の推進状況」、資料 No. ３－３「高校教育を巡る最近の動き」、資料 No. ４「県立高等学校の入試状況の推移（全日制）」、資料 No. ５「中学生の進路希望等に関するアンケート結果」に基づき説明。

（２）　後期計画策定に向けた意見交換

＜意見交換テーマ＞
都市部、中山間地・沿岸部における今後の高校のあり方について

【県教委】
・　二戸ブロックについては中山間地域に属するが、ブロック内には比較的規模の大きな学校と小規模校が存在している。また、隣接する盛岡ブロック、久慈ブロックとの交流もある。このような状況も踏まえ、テーマに基づき御意見をいただきたい。

【藤原　二戸市長】
・　本地域では、人口減少が進み労働力不足が顕在化しているが、地元の高校生が地域の活力となっている事実がある。
・　二戸の先人である「相馬大作」は、人は「立志、択交、読書」によって形成されると謳い、松下村塾の門下生にも説く等、近代日本の幕開けに大きな役割を果たすこととなった多くの人材を育成した。この「相馬大作」の教えは二戸地域の人々に引き継がれているが、明治維新 150 年の節目を迎える中、当該地域においても、「ひとづくり（地域の将来を担う人材育成）」はま

すます重要になっていると考えている。

・　二戸市には福岡高校及び福岡工業高校が設置されているが、高校生に対する「ひとづくり」については、社会に出てすぐに必要とされるスキルを身に付けさせる必要があると考えており、地域を知る取組やボランティア活動への参加等、社会に溶け込む体験を通して、コミュニケーション能力をはじめとする社会人基礎力を身に付けてほしいと考えている。

・　高校再編については、人口が減少する中にあって、学校の廃校や統合は避けられないと考えているが、「ひとづくり（地域の将来を担う人材育成）」を進める地域の取組や特殊事情等も考慮した上で進めてほしいと考えている。

・　地元の高校の存在は、地域の「明るさ」の源でもある。できる限り存続させながら、魅力ある学校づくりや「ひとづくり（地域の将来を担う人材育成）」に取り組んでいただきたいと考えている。

【山本　軽米町長】

・　人材育成は非常に大切であると考えており、後期計画の策定に当たっては、「人材育成」に焦点を絞って検討を行っていただきたいと考えている。

・　全国的に少子高齢化の進行により若年層が減少しており、この傾向は今後も続くものと考えられ、二戸地域も例外ではない。このような中で、町では、雇用拡大に向けた施策等、若い世代を地域に残すための取組を進めており、高校生に対しても、地元定着に向けた様々な取組を進めているところである。

・　高校再編についてであるが、地域における出生者数が少ないことから、当然、中学校卒業予定者数や高校入学者数が少なくなり、議論が学級減、統合、廃校等に集中してしまうおそれがある。このような議論は、時の流れとしてやむを得ない部分もあるが、もう少し知恵を出し、二戸地域の産業を踏まえた地域を担う人材の育成等、様々な観点から高校再編の検討を行っていただきたいと考えている。

・　県南地域を中心とする北上川流域地域では企業の設備投資が活発であり、産学官連携も進んでいるが、県北地域において同様の状況を創り出すことは難しいと考えている。したがって、当地域においては、地域の強みを生かした次世代型の農業（一次産業）や食産業を核とした第６次産業化に取り組み、地域の活性化を図りたいと考えている。

・　高校再編の検討に当たっては、このような地域の産業を支える若い世代を育成するという観点も重視しながら、総合学科として設置した一戸高校のように、特色のある再編を検討いただきたいと考えている。（なお、総合学科である一戸高校の取組を評価している。）

【五枚橋　九戸村長】

・　再編計画において、中学校卒業予定者数に対する県立高等学校の募集学級数が示されているが、今後、後期計画の策定に向けた資料を作成する際には、県立高校の募集学級数とともに私立高校の状況（募集学級数等）も見える形で示していただけると、県全体を視野に入れた検討が容易になると思われる。

・　地域において、地元の高校に通う高校生の存在意義は大変大きいことから、高校再編を検討する際には、高校の配置に関し、都市部に集中することのないよう県全体のバランスを考慮する必要があると考えている。

・　前期計画期間においては、伊保内高校は維持・存続されることとなった。村では、伊保内高校の存続に向け、様々な支援をさせていただいているが、むしろ伊保内高校の生徒が村を支えているのではないかと評価している。これは、地域行事の実行、伝統芸能の維持継承、ボランティア活動の実施等において、伊保内高校の生徒の存在が不可欠となっているからである。地元高校の存廃は、地域の存亡に関わる問題とも言えると考えている。

・　小規模校は将来的に募集停止、統合されることが見込まれるが、村としては「座して待つ」のではなく、伊保内高校の存続に向け、同校の進路指導、部活動及び課外活動等において地域住民と連携・交流する等のお手伝いが可能であれば対応したいと考えている。
・　後期計画の策定の際には、地域の中で小規模校が存続でき、かつ、生徒が満足した高校生活を送れるような環境・条件づくりについても検討を進めていただきたいと考えている。

【田中　一戸町長】

・　高校のあり方として、人材育成の観点は重要である。日本全体で人口が減少しており、特に二戸地域においてはこの傾向が加速している状況にある。このような中で、将来の地域を担う人材は地域で育てていく必要があると考えている。
・　一戸高校は、地域の事業所等への貴重な人材供給機関となっている。先日も地域の介護福祉系の事業者団体から町に対し、一戸高校における福祉系の学びの維持について要望があったところである。
・　また、子どもたちの多様化する進路目標を実現させるために、どのような学校を整備していくかという観点も大事である。学校数の多い盛岡市内の高校へ進学しないと進路目標の実現が困難となることのないようにする必要がある。授業料は無償化されているが、通学費を含め、その他の費用は当然発生するものであり、遠隔地は不利である。家庭の経済事情により、子どもたちが将来の進路目標をあきらめることのないようにしなければならないと考える。
・　後期計画の策定に当たっては、子どもたちの進路目標の多様化も踏まえ、二戸地区としてどのような教育体系（学校・学科の配置）が必要なのか、改めて検討する必要があるのではないかと考えている。

【古舘　二戸市商工会専務理事】

・　産業界の視点では、地域の高校が無くなることは、地域の働き手がいなくなることに直結すると考える。よって、できる限り地域に高校を残してほしいという思いはある。
・　しかしながら、資料 No.５「中学生の進路希望に関するアンケート結果」によると、高校の規模として４学級以上が良いと回答した割合が増えていることから、高校を集約する必要があるという考えもあるが、集約により通学時間が増加し、通学が困難となる場合も想定される。
・　また、県教委の立場、地域の立場にも差異があり、高校の再編については様々なジレンマを解決しながら検討する必要があることから、今後の意見交換等を通じ、その溝を埋めていくことができればよいと考えている。
・　部活動の活性化等を考えると、ある程度の規模が必要と思われるが、小規模校であっても取組次第では地域社会とのより良い連携が生まれる可能性がある。高校教育の段階から地域連携に関わることで地域への愛着が育まれ、たとえ地域外の大学へ進学したとしても卒業後に、地元に戻ってくると思われるので、地域社会との連携をさらに進めてほしいと考えている。

【十文字　新岩手農業協同組合北部営農経済センター長】

・　少子化が進む現在の状況に対しては残念に思うが、この状況を踏まえると、現状の学校体制・学校規模を維持し続けることは難しいと理解している。
・　将来を担う子どもたちが夢と希望を持ち、明るい学校生活が送れるよう魅力ある学校づくりに努めてほしいと考えている。
・　魅力ある学校としては、部活動（スポーツ・文化）の盛んな学校があげられるが、「いじめ」の無い学校、安心して学べる学校も魅力ある学校のひとつと言えるのではないかと思っている。そのような安心して学べる学校をつくっていくためには地域と学校が一体となって学校の魅力づくりに取り組んでいく必要があると考えている。

・　二戸地域には様々な分野で実績を残している社会人が多く在住しているので、そのような方々が学校の講師として子どもたちに話をする機会を設けることができれば、子どもたちの将来の目標づくりの手助けとなるのではないかと考える。なお、二戸地域は地域の学校とのつながりが深く、子どもたちは地域の行事等への参加を通じ社会性を育んでいるものと考えている。
・　地域の学校は将来の地場産業を担い支える人材を育成しているとも言えることから、地域に学校が存在することはとても大事なことだと考えている。地域の活性化と、学校の活性化・魅力化は車の両輪として捉えており、このような観点も踏まえて後期計画の検討を進めていただきたいと考えている。

【小野寺　㈱アイソニック軽米事業所代表取締役】

・　二戸地域の事業者も、企業努力等により、従来の中途採用に加え、新卒採用も可能な状況となってきている。これまでは、地域の高校へ求人を出せなかったが、近年ようやく求人を出せるようになった。しかしながら、二戸地域の新卒者に対する求人も他地域と同様に急増しており、求人を出しても応募者が集まらないというジレンマに陥っている状況にもある。
・　このような状況もあるが、地域の将来を担う人材を育成する観点からみると、地域の高校は大変重要な存在であると考えている。
・　採用する立場からの意見となるが、学校教育を通じて地域社会との関わりを持ったことのある生徒は多いが、関わった地域が限定されている傾向が強く、やや物足りない。企業の成長・発展を支える人材を育成するために、可能な限り、県内全地域に広く関わることのできるような教育を進めていただきたいと考えている。
・　今後、生徒数の減少を踏まえた高校のあり方について地域検討会議を通じて考えていきたい。

【苅谷　新岩手農業協同組合理事】

・　小規模校の生徒が不利にならないよう教員の配置に関し、配慮をお願いしたい。小規模校であっても主要な教科・科目の教員はしっかりと配置されると思うが、教員配置が限られてくる教科・科目もあると思われる。例えば、教員は二戸ブロック全体として配置し、福岡高校と周辺の小規模校を兼務する等の対応策を検討してもよいのではないかと考える。
・　二戸地域には県北青少年の家が設置されていることもあり、冬のスポーツが盛んである。学校の魅力づくりとして、部活動に冬のスポーツを取り入れ、学校の活性化を図ってもよいのではないかと考える。

【山本　九戸村産業関係代表者】

・　参考資料No. 1「平成30年度岩手県立高等学校募集定員・合格者数一覧表」及び「参考資料No. 2「県立高等学校の全県、ブロック別入試状況」を見ると、中山間地、沿岸部の高校は定員割れが多く、一般入試倍率も低い状況にあり、農業関係者の立場としても大変残念である。この傾向は、将来、農業に携わる人材が減っていくということでもあり危機感を持っている。
・　農業をはじめとする地域の将来を担う人材を育成するため、小規模校であっても維持・存続させていただきたいと考えている。

【藤館　九戸村産業関係代表者】

・　地域の事業者にとっても伊保内高校との連携が必要不可欠となっており、今後も伊保内高校の維持・存続をお願いしたい。
・　現在の再編計画においては、入学者数が1学級 20 人を上回れば存続が可能となっており、地域に配慮した計画となっており、大変評価している。後期計画の策定においても、引き続き、地域への配慮をお願いしたい。

【瀧　(株)一戸ファッションセンター代表取締役社長】

・　県北地域には縫製関係の事業所が多く、地域の特徴的な産業と言える。
・　今年度は平成 31 年２月 26 日に二戸市民文化会館にて地域の縫製事業者主催で「第４回北いわて学生ファッションデザイン表彰式＆ファッションショー」を開催することとしており、県内の高等学校、専修学校及び大学の学生・生徒を対象にデザインを応募し、応募があった 300 点の中から選ばれた優秀賞作品及び奨励賞作品を発表することとしている。
・　県北地域にブランド商品を縫製している事業所があることについての認知度はまだまだ低いが、特に地域の高校生には、このイベントを通して地域の産業に対する関心を高めてほしいと考えている。業界としても将来の地域産業を担う人材の育成に向けた取組を進めていきたいと考えている。

【高橋　(株)一戸夢ファーム農業担い手育成指導部長】

・　新規就農者のための農業研修施設を運営している。学校形式で研修期間は２年間。これまでの６年間で 10 人の修了者を送り出したところである。研修生の出身高校の所属学科をみると、農業学科出身の者だけでなく、普通科、商業学科、工業学科など様々である。ちなみに一戸高校（総合学科）出身者は１人である。
・　１年目の冬に座学にて基礎知識を学ぶ研修体系としているが、農業業界においても「スマート農業」等、技術革新が進んでおり、就農を目指す者にとっても、高校教育において農業の基礎となる「生物」や「化学」等の知識をよりしっかりと学ぶ必要性が出てきていると感じている。農業に限らず、他の業界においても、技術革新のスピードの速い今後の新しい時代に対応するため、基礎的な知識を身に付けることの重要性がますます大事になってくるものと考えている。
・　就農者においてはＵターン人材が多い状況にはあるが、特に第一次産業においては、「ふるさとに戻る」という動機づけをどのように図っていくのかが今後の産業界における課題であると考えている。
・　また、第一次産業の発展に向け、学校と現場との連携をより深化させる必要性があると考えており、どのような形でお手伝いができるのか検討しているところである。高校教育において第一次産業に対する興味・関心を醸成していただけるとありがたい。

【馬淵　二戸市小中学校ＰＴＡ連合会長】

・　本県は高卒での就職率が他県に比較し高く、県内では特に県北地域においてその割合が高いと承知しており、就職に有利な商業や工業の学びがこの地域に存在することが大事であると考えている。一方、上級学校への進学率も上昇傾向にあることから、普通科に対する期待・ニーズも高い状況にある。（二戸地域に商業に関する学科がないのは寂しく感じる。）
・　中学校卒業予定者数が減少する傾向を考えると、学級減等の対応はやむを得ないが、このような状況を踏まえると、高校再編においては、バランスの取れた学科の配置とすることが求められるのではないかと考えている。また再編の内容によっては、通学に対する支援策を検討する必要性も生じてくるのではないかと考えている。
・　部活動に関連した意見となるが、近年、小中高ともに、学校外で活動する「スポーツ少年団」や「クラブチーム」等による活動が活発になってきており、学校単位の活動は減少傾向にある。部活動のあり方を時代の変化に合わせ、見直す時期に来ているのではないかと思われる。
・　県では通学区域のあり方も検討していると聞いているので、後期計画の策定に当たっては、その検討結果も踏まえ、総合的な検討を進めていただきたいと考えている。

【玉舘　軽米町立軽米中学校ＰＴＡ会長】

・　二戸地区の保護者からみると、都市部には高校が多く設置されており羨ましく思う。また、二戸地域から高校が無くなるのではないかという不安も抱えている状況にある。
・　現在、軽米中学校卒業者の約６割が軽米高校へ進学している。軽米高校の存続に向け、この割合を高めたいと考えているが、保護者は子どもの進学希望を優先したいと考えることから難しい課題である。
・　資料 No. 5「中学生の進路希望に関するアンケート結果」において、望ましい通学時間を１時間以内としている回答が多いが、感覚的には１時間でも長いと思っている。通学に関する生徒の時間的負担、保護者の金銭的負担は少ない方が望ましい。軽米町は、中学校のスクールバスに軽米高校に通う高校生も同乗できる支援策を実施しており、大変助かっている。
・　教育関連の予算を十分に確保し、より良い教育環境の整備に努めていただきたいと考えている。

【野﨑　一戸町ＰＴＡ連合会長】

・　都市部と中山間地の違いは選択肢の数にあると考えている。
・　大学進学の希望を持っている子どもの保護者は、進学実績のある高校へ通わせたいと考え、部活動を一生懸命取り組みたいと考えている子どもの保護者は部活動が盛んな高校へ通わせたいと考えるものであり、盛岡等の都市部には、その選択肢が数多くあるというのが現実である。
・　また、大学進学、部活動ともに、教員の能力次第でその実績が大きく異なるという現実もある。よって、地域の学びの質を保証するということであれば、教員配置の権限を地域に持たせる仕組みを検討してもよいのではないかと考える。
・　中学校卒業予定者数の減少に伴う、高校の募集学級数を減らす必要があることは理解した。しかしながら、集団生活を通じて切磋琢磨する環境も大事であることから、ある程度の学級規模は必要である。よって、主要な教科に関しては、他校と合同で授業を行う等の仕組みを構築してみてもよいのではないかと考える。
・　子どもたちの人生において高校生活の３年間は最も重要な時期であり、なるべく多くの有意義な経験をさせる必要がある。そのための機会をどのように与えるかを考えなければならない。少子化であるからこそ、一人ひとりの子どもたちの質を上げることが求められ、そのような対応が可能となるよう取組を進めることが学校の魅力づくりにつながるのではないかと思っている。

【鳩岡　二戸市教育委員会教育長】

・　地域の活性化というのは大人の役割であり、行政の責任において取り組むべき課題である。したがって、地域の活性化において、地元の高校へ通う高校生を過度に頼りにしてはいけないと考える。
・　また、大人の都合で高校生の学びの広がりを狭めることがあってはならない。教育を担う者のひとりとして、このような観点に立ち、学校教育を考えているところである。
・　この観点に立つと、中学生の希望（ニーズ）は大変「重いもの（重視すべきもの）」であると言える。資料 No. 5「中学生の進路希望等に関するアンケート結果」において、学校の規模として、勉強や部活動をする上で「４学級以上が良い」と回答した割合が大幅に増加した事実は重く受けとめる必要がある。学びの主体は高校生であることから、後期計画の検討に当たっては、この結果を尊重しなければならないと考える。
・　再編計画では、望ましい学校規模の確保による教育の質の保証と、地理的条件を考慮した教育の機会の保障を柱としているが、実現に当たっては、いずれも財政措置が必要になるもので

ある。

・　児童・生徒数が減っていく中で、高校再編は避けられないものと考えるが、住んでいる場所によって格差があってはならない。例えば、統合を進めるに当たっては通学支援策も併せて実施する等の対応が必要になってくると思われる。このように、後期計画の策定に当たっては、地域によって所得水準に差があること、地域によって公共交通機関の状況が異なること等の現実を直視し、検討する必要がある。

・　また、これからは、二戸地区全体として「普通高校のあり方」及び「専門高校・総合学科高校のあり方」を考えていかなければならない時期に来ているのではないかと考える。二戸市には小中学校が現在12校あるが、二戸市の校長会議には一戸高校の校長にも出席していただき、総合学科の魅力等について説明してもらっている。こうした二戸地区全体を視野に入れた取組を、今後も継続していく必要があると市教委としても考えている。

【菅波　軽米町教育委員会教育長】

・　資料３－２「新たな県立高等学校再編計画（前期計画）の推進状況」において、学級減等の実施が延期となった学校が示されている。延期理由を後ほど御教示いただきたいが、いずれも直近の状況等を検証し、柔軟に対応した結果であると理解しており、正しい判断をしていただいたと思っている。今後も個々の状況に即した対応をお願いしたい。

・　高校のあり方、特に小規模校のおける教育の質の保証に関する意見であるが、どの地域においても地元高校生の存在は地域の活性化に必要不可欠な存在であることは言うまでもないが、中学校卒業者数の減少に伴い、地元高校への入学者数が減少し、小規模化が進んでいる現実もある。こうした小規模校においても生徒の進路希望は多様化し、対応が難しくなっている面は否めず、小規模校における教育の質の維持・向上についての対応を検討する必要があると思われる。

・　例えば地元の軽米高校は１学年２学級募集の小規模校であるが、例年、進学及び就職において非常に良い実績をあげており、このことは同校の大きな特色、魅力となっている。これは軽米高校の教員による献身的な努力の賜物と考えているが、現在の指導体制（教員数等）が存在するゆえに成立しているとも言えるのではないかと考えている。

・　したがって、小規模校において教育の質を維持・向上させるため、今後も現在の指導体制を継続していただきたいと考えている。そのために必要な施策を実施していただきたいが、例えば少人数学級の導入も対応策の一つとして検討する価値があるのではないかと思われる。実質、少人数学級となっていることは理解しているが、学級減や教員減の防波堤となるような少人数学級の仕組みを検討、導入していただきたいと考えている。

・　また、学校間連携の仕組みを工夫する等の具体的な施策の実施により、小規模校においてもその魅力が損なわれないよう、県の積極的な関与をお願いしたい。

【漆原　九戸村教育委員会教育長】

・　後期計画の具体的な策定に向け、緊張感を持って意見交換に臨んでいるところである。

・　資料３－１「新たな県立高等学校再編計画の概要」にもあるとおり、各高校においては、「①生徒自らの進路希望に応じた学習のできる学校」、「②学校行事、部活動等に活発に取り組める学校」、「③生徒、教師との幅広い出会いや集団活動を通じ、切磋琢磨できる学校」の３つの柱（観点）に基づいて教育活動を推進していると承知している。

・　伊保内高校は１学年１学級募集という小規模な学校であるが、この３つの柱（観点）に基づいて教育活動を推進した結果、色々な形で成果をあげていると認識している。

・　成果の内容であるが、具体的には、教員同士のつながり、生徒同士のつながり、小中高の学びのつながりがそれぞれ醸成されている。先日、高校の教員が中学校で授業を行ったが、この

ような中高連携の取組は 40 年間続いている。生徒同士のつながりについては、ボランティアとして高校生が小学生に勉強を教える等、様々な行事を通じて生徒同士のつながりが醸成されている。また、小中高の学びのつながりについては、小中高学力向上推進事業として「書く」ことに主眼を置いた取組を進めており、家庭学習についても小中高のつながりを意識した取組を進めているところである。こうした取組が学校の魅力づくりにつながると考える。地域の子どもたちにとっての「憧れの中学生」、「憧れの高校生」を育てることが学校の魅力づくりであり、教育現場に携わる者として大事にしていかなければならない考え方であると思っている。

・　資料 No. 5「中学生の進路希望に関するアンケート結果」において、高校の規模として４学級以上が良いと回答した割合が多いのは、進路の実現を図るために必要な学校規模という観点だけではなく、部活動を活発に行う上で必要と考えられる規模という観点も考慮し、回答したからではないかと考える。小規模校においては、部活動の高校間同士の連携のあり方についても検討する必要があるのではないかと考えている。

・　小規模校における教育環境の充実及び魅力化に関し、所在する市町村が様々な形で支援を行っているところであるが、市町村による教員配置等の人的支援は様々な理由により対応できない状況にある。したがって、子どもたちの夢の実現に向け、小規模校において、進学指導等に必要な教員の配置について特段の配慮をお願いしたい。

・　再編計画において、専門高校を統合する場合は、学科の機能を維持できるよう、既存校舎の施設を活用する「校舎制」の導入も検討することとされているが、他県において普通高校と専門高校の統合及び普通高校同士の統合において「校舎制」を導入している事例があれば紹介してほしい。また、そのような事例がある場合、岩手県でも導入する余地があるのかどうかについても併せて検討してみてもよいのではないかと考えている。

【中嶋　一戸町教育委員会教育長】

・　小中学校では「ふるさと学習」や地域と関わる体験学習を多く実施していることもあり、感覚的には地元に残りたい子どもたち、子どもを地元に残したいと考える保護者の数は増えているように感じている。

・　保護者は子どもの進路希望をかなえることを優先することから、仮に子どもたちが進路先を地元以外に求めた場合、それを応援することとなるが、本音は地元に残ってほしいと考えるものである。

・　中学校卒業予定者数の減少に伴う学級減等の高校再編はやむを得ないものであると理解するが、町では高校卒業後の出口のひとつである就職先の確保等、地元定着に向けた取組を進めており、再編計画の策定においては中学校卒業予定者数のみを理由とした画一的な計画とならないようお願いしたい。

・　また、併せて、再編計画の策定及び推進においては、二戸地域全体の実情やニーズを考慮したものとしていただきたいと考えている。

・　現在、地元自治体や企業が学校の魅力づくり等を支援する取組が進んでいることから、具体的な再編の計画を早急に出すのではなく、取組の成果が表れるまで見守ることも選択肢のひとつではないかと考えている。

【小野寺　二戸地区中学校長会】

・　子どもたちや保護者の考え方は、都市部、中山間地、沿岸部では、それぞれ大きく異なる。

・　資料 No. 5「中学生の進路希望に関するアンケート結果」について、平成 30 年度の調査対象は全生徒としていることに対し、平成 27 年度は第３学年の１学級を対象として調査していることから、平成 27 年度の調査結果においては、第３学年の学級数の多い都市部の生徒の意見はあまり反映されず、むしろ中山間地の生徒の意見が強く出ているデータとなっているのでは

ないかと思われる。したがって、アンケート結果に基づく検討を行う際には、ブロック毎にデータを集計し、各ブロックにおいて、平成 27 年度に比較し、意識がどのように変化したのか等を分析した上で議論すべきではないかと考えている。

・　アンケート結果の望ましい通学時間の回答であるが、生徒は、それぞれの家庭の経済事情も考慮しているのではないかと思われる。

・　二戸地区の中学校では、子どもたち自らにより自分の将来の進路について考えてほしいと考えており、職場体験や専門学校の見学等の取組を行っている。これらの取組を通して自らの将来を思い描き、どのように中学校生活を送るか、また、上級学校への進学をどのように選択していくべきか等を検討していってほしいと考えている。このような取組は、どの地区においても実施していくべきと考えている。

【県教委】

・　地域の高校が地域の将来を担う人材育成の場となっていることについて意見をいただいた。

　県としても、県が事務局となり関係機関で構成する「いわてで働こう推進協議会」を設置し、若者・女性の県内就業促進に向けた取組を進めているところであるが、子どもたちが基礎的な知識・学力、社会性を身に付ける上で、地域の高校が人材育成の場として重要な役割を果たしている事について改めて確認をさせていただいた。

・　また、再編計画では、教育の機会の保障を柱とし、可能な限りブロック内に学びの選択肢を残すこととしているが、後期計画の策定に当たっても同様の考え方で検討していきたいと考えている。

・　小規模校の維持・存続に関する意見もいただいたが、再編計画では、生徒数が減少していく中にあっても、高校としての教育の質を確保するためには、生徒の多様な学習ニーズに応え、集団活動による社会性の育成を図ることが大切であることから１学年２学級以上が必要としており、１学年１学級とする場合においても、高校としての教育の質を維持していくための集団として、少なくとも１学級 20 人を超える人数が必要としている。

　後期計画の策定に当たっては、この基準を前提としつつも、地域における高校の役割や社会情勢の変化等も踏まえた検討を今後進めていきたいと考えている。

・　教員配置や少人数学級導入に関する意見もいただいたが、教員の配置定数に関わるものであり、実現に向けては様々な課題がある。県としても、国に対し教員の配置定数に関する基準の見直しを要望しているところであるが、国の動向を注視しつつ、現実的にどのような対応が可能なのか研究していく必要があると考えている。

資料

後期計画の策定に向けた地域検討会議（第1回 二戸ブロック）
出 席 者 名 簿

No	市町村等	氏　名	所　属・役　職　等	備 考
1	二戸市	藤 原　　淳	二戸市長	
2		古 舘　聖 人	二戸市商工会　専務理事	
3		十文字 正 勝	新岩手農業協同組合北部営農経済センター長	
4		馬 淵　貴 尋	二戸市小中学校ＰＴＡ連合会　会長	
5		鳩 岡　矩 雄	二戸市教育委員会　教育長	
6	軽米町	山 本　賢 一	軽米町長	
7		小野寺 祐 治	㈱アイソニック軽米事業所　代表取締役	
8		苅 谷　雅 行	新岩手農業協同組合　理事	
9		玉 舘　　誠	軽米町立軽米中学校ＰＴＡ　会長	
10		菅 波　俊 美	軽米町教育委員会　教育長	
11	九戸村	五枚橋 久 夫	九戸村長	
12		山 本　弘 樹	九戸村産業関係者代表（農業）	
13		藤 館　卓 弘	九戸村産業関係者代表（商業）	
14		漆 原　一 三	九戸村教育委員会　教育長	
15	一戸町	田 中　辰 也	一戸町長	
16		瀧　　博 司	㈱一戸ファッションセンター　代表取締役社長	
17		高 橋　寿 一	㈱一戸夢ファーム　農業担い手育成指導部長	
18		野 﨑　貞 春	一戸町ＰＴＡ連合会　会長	
19		中 嶋　　敦	一戸町教育委員会　教育長	
20	地区中学校長代表	小野寺 一 行	二戸地区中学校長会（一戸町立一戸中学校長）	

【オブザーバー】

No		氏　名	所　属・役　職　等	備 考
21	県議会議員	五日市　　王	岩手県議会議員	
22		工　藤　　誠	岩手県議会議員	
23	県立高等学校	高　橋　正　勝	軽米高等学校長	
24		高　橋　良　一	伊保内高等学校長	
25		伊　藤　浩　昭	福岡高等学校 副校長	
26		片　岡　順　一	福岡工業高等学校長	
27		根　反　　馨	一戸高等学校長	

【県教育委員会】

No		氏　名	所　属・役　職　等	備 考
28	県教育委員会事務局等	時　枝　直　樹	県北教育事務所長	
29		佐　藤　秀　司	県北教育事務所企画総務課長	
30		村　田　　賢	県北教育事務所教務課長兼主任経営指導主事	
31		山　下　一　幸	県北教育事務所主任指導主事	
32		三　浦　英　浩	県北教育事務所主任指導主事	
33		坂　本　　真	県北教育事務所指導主事	
34		佐　藤　　有	学校調整課首席指導主事兼総括課長	
35		森　田　竜　平	学校調整課学校調整担当課長	
36		藤　澤　良　志	学校調整課高校改革課長	
37		宇夫方　　聰	学校調整課高校改革担当主任指導主事	
38		梅　澤　貴　次	学校調整課高校改革担当主査	
39		市　丸　成　彦	学校調整課高校改革担当指導主事	
40		谷　地　信　治	学校調整課高校改革担当指導主事	